

いわゆる過疎地域の家族関係(8)

— 農家の後継者について —

織田揮準¹⁾・続 有恒 ほか 過疎研究グループ

恩師続有恒教授は昭和47年9月25日、「いわゆる過疎地域の家族関係」の研究なればにしてご逝去された。

本研究報告を師のご靈前に捧げるとともに、ご冥福をお祈り致します。

I 問題

1960年代のわが国の高度経済成長は、国民の生活水準の向上をもたらした。しかし、その経済成長があまりにも急激なため、各方面にいろいろな歪みが生じた。公害問題、過疎・過密問題など、急激な経済成長による歪みの代表的な現象といえるであろう。

われわれが、過去数年間、面接調査を続けてきた農山村についてみても、農家の次三男はむろんのこと、数年前までは農業を継ぐべく村に残ったであろう長男までが都会へ流出しており、その傾向は今後ますます進むであろうことが判明した。農業労働者の減少は全国的な傾向で、従来日本ではほぼ5割を占めてきた農業労働者人口は1961年では約30%に、1967年では約20%にまで減少し現在の推定では1985年までには10%を割るといわれている。いわゆる農山漁村で現在進行中の過疎化現象は、今後10年あるいはそれ以上も続くことが予想される。

この過疎化の問題は、単に農村のみの問題ではなく、これから日本の日本経済、教育・文化を考えていく上で様々な重要課題を含んだ現象といえよう。教育心理学を研究するわれわれとしても、農山漁村で進行しつつある過疎化現象及びその結果必然的に生ずる大都市工業地域への人口の大量移動による都市とその近郊にみられる過密化現象を避けて通るわけにはいかない。過疎・過密いずれの現代的現象も、人間が快適な生活をいとなむ上での基本的条件を欠いているといえよう。

われわれは、これまで過疎化に伴なうムラの生活の変化全般について調査してきた。本報告では、このようにして得られた面接資料に基づき、農家の後継者問題を中心に稲作農家の将来について検討する。山形、長野、愛

知、島根、熊本の全国5県の農山村地域で面接調査をしたが、各地の概容（村勢一般、ムラの印象など）はすでに続教授が報告している（続ほか、1970, 1971）。また、各地の調査結果は研究資料集としてまとめられている*。

調査した5地域は農村あり山村あり、東北から九州まで、出稼ぎ型過疎地域と挙家離村型過疎地域などバラエティに富んでいる。5地域のうち稲作農村地域は、山形県最上郡大蔵村、島根県飯石郡頓原町と熊本県球磨郡水上村の3ヶ所であった。なかでも大蔵村と頓原町にはいくつかの共通点がみられたので、今回の分析ではこの両地域を取り上げ、比較検討する。その共通点とは、両地域とも豪雪地帯であること、一毛作の稲作中心地帯であること、農外収入としては夏期の村内及び近郊での土木工事の土方仕事及び冬期の長期出稼ぎに限定されていることなどである。

II 方 法

1. 資 料

山形県最上郡大蔵村沿の台地区（以下大蔵村と略す）及び島根県飯石郡頓原町（以下頓原町と略す）で採集した面接資料（名古屋大学教育学部教育心理学科研究資料No.4とNo.1）を用いる。大蔵村の面接調査は1970年8月31日から9月5日の6日間、面接家庭は42戸、頓原町の面接調査は1970年10月29日から11月3日までの6日間、42戸の家庭に面接した。

2. 分析方法

両地域で面接したケースのコメントから、農家の跡取り問題に関連した項目を抽出し、農家の人々が農業後継者問題をどのように考え、その対策をたてているか分析する。

1) 名古屋市立女子短期大学助教授

* 資料集の名称は文献の欄に記してある。

III 結果及び考察

1. 農村の農業後継者はいるか?

日本の農業の将来を考える上で、まず問題とすべき点は、現在及び次の世代の農業後継者が確保されているかということであろう。そこで大蔵村及び頓原町の農業後継者確保の状況から検討してみよう。

われわれが面接調査した山形県の大蔵村40戸の農家のうち、義務教育を終了して農業に従事している跡取りは32名、別居中の者はわずか3名にすぎなかった。これに対して島根県の頓原町では、義務教育を終了した農家の子弟28名中、同居中の者は13名、跡取りの半数以上(15名)が別居している(うち3名は高校又は大学在学中)(表1)。頓原町では、10代、20代の若い長男の流出が激しい。面接調査した30代の農家の跡取り13名のうち、別居している者はわずかに3名であるが、20代になると、12名中8名が別居している。

表1 面接した農家の跡取りの同居・別居状況
(上段は同居者数、下段は別居者数)

世帯主の年齢 跡取りの年齢	30代		40代		50代		60代以上	
	大蔵村	頓原町	大蔵村	頓原町	大蔵村	頓原町	大蔵村	頓原町
0才 ～中学生	2	6	2	2				
～19才			4	1 1		1 1		
20代			5	2 5	9 1	2 3	3	
30代					5 2	0 2	4 2	3 1
40代							2	
不明								2 1

〈注〉大蔵村では、子どもがなく弟夫婦が跡を取っている例が1件あった。

われわれが訪問した農家は村全体からみればごく限られた農家のサンプルではあるが、表1は大蔵村と頓原町における農業後継者確保の実態を端的に示しているといえよう。頓原町では「30代以上の農家の跡取りは村に残っている。しかし、10代、20代の跡取りはいない」と農家の人々が話すように、すでに10年以上も昔から、次三男同様に長男の都会への流出が始まっていたことがわかる。この長男流出の時期は、全国的な過疎化の始まりと同期を一にしており、頓原町が日本経済の動きを敏感に反

映する地域であることがうかがえる。若年農業労働者の激減に伴ない、農業の老齢化は今後一層進み、いわゆる「じじ・ばば農業」へと衰退の一途をたどるものといえよう。

一方、大蔵村では、今も昔と同様に、農家の跡取りが確実に確保されていることがわかる。農家の跡取りは義務教育終了と同時に、村に留まり、農業に従事する。表1から推測する限り農業後継者の都会流出は極くまれで農業労働者の新陳代謝が確実に行なわれ、農業の老齢化現象はここ当分あらわれそうにない。

両地域とも稲作中心の豪雪地帯で、農業収入一本では生活できない。生活費の不足分を夏期の土方等の賃仕事及び冬期の長期出稼ぎでやっと支える、といった共通性があるにもかかわらず、農家の跡取り状況には極端な差異が認められた。頓原町は日本経済の好不況に敏感に反応するのに対し、大蔵村は日本経済の流れを超越した昔ながらの村の生活が続けられているような印象を受け

る。その原因はどこにあるだろうか。両地域の農家の跡取りに焦点を合せながら面接資料を比較検討する。

2. なぜ若い農業後継者がいないか (頓原町の場合)

先の考察で、頓原町では農家の10代、20代の本来ならば農業に従事するはずの跡取りが、義務教育を修了するとともに、都会に流出することがわかった。これが頓原町における今日の農家の跡取りの一般的な姿である。そこには過去何百年と続いてきた長男が農家の跡を継ぐと

いう伝統的パターンが崩れ、ないしは否定されつつあることが推測される。

では、農家の人々は長男の都会流出という現実に直面し、どのように考えているだろうか。

1) 農業後断者の流出に対する村人の一般的認知。

村に10代、20代の若い農家の後継者がいなることは、われわれの面接した誰もが認めたところである。頓原町の人々が、跡取りが都会へ流出する理由として、最初にあげるのは、〈米作りによる農業収入のみでは人並みの生活ができない437>* ということである。換言すれば、農業収入では向上した現在の生活を維持できない。不足分は夏期の土方など村近辺での賃仕事、冬期の出稼ぎでまかなわざるを得ない。若い者がこのような状態の農業に魅力を感じるはずがない。当然農家の跡取りが都会へ出て行く、というのが共通した認識であった。農家の人々があげる跡取り流出の理由は、

- 農業（百姓1本）では食べて行けない〈402, 404, 409, 414, 425, 431, 437〉
- 農業はもうだめだといわれている〈405, 407, 412, 415〉
- 米の余る時代に百姓してもつまらん〈410, 414, 436〉
- 米だけでやっていては、貧乏な生活しかできない〈437〉
- 親自身が百姓を嫌っている〈434, 436, 440〉

など、いずれも農業は息子が選択すべき将来性のある職業ではないという。しかも、〈都會に出た方が、現金収入が楽だ428〉となれば、親自身も長男を農業に就かせる積極的な理由もみつからない。いきおい長男も新しい職業を求めて都會に流出することになる。その結果、頓原町では確実に農業後継者は減少し、農村の老齢化が促進されることになる。

第2は嫁飢餓が、若い跡取りの都會流出に拍車をかけるとする認識である。〈農家へはお嫁さんは来ない401, 402, 407, 409, 412, 414, 426, 428〉 という現状である。〈結婚問題が若い人の農業意欲をなくした401, 402〉 〈この辺では、男は大体25才頃で結婚するが30才になっても結婚できない人は悲劇だ。自信をなくし自暴的になっている401〉 という。たとえ、情熱をもって近代農業経営に取組もうとする若者がいたとしても、そのよき理解者すなわちよき伴侶がなければ、その意欲や夢がいつしか消えるのもごく自然のことといえよう。〈若い娘はみな都會に出てしまう401〉 〈自分の子どもを百姓に

やる気はない426〉 など、若い娘はみな都會へ出るし、親としても将来性のない農家に嫁がせようとは思わない。10代、20代の農家の跡取りが村に留まらない現在、すでに農家の嫁需要すらなくなりつつあるのかもしれない。そうゆう意味では、嫁飢餓という言葉はあてはまらないかもしれない。

第3は、高校進学の普及による農家の跡継ぎの都會流出である。〈農林高校へ入れておけば、農業を継いでくれると思って、進学させる親が多いが、實際は都會に就職してしまう401〉 とか 〈親は自分たちの歩んだ道を、子どもに歩ませたくないということで、最近は教育する440〉 など、ともかく高校まで進学させようとする親が多い。そこには、高校卒業後は農業を継いで欲しいという親の願いが込められているであろうし、また、親自身が農業に見切りをつけ、より有利な条件で就職させる手段として学歴をつけてやろうとする親心から出ている。頓原町の場合、隣町への高校通学も可能であるが、高校進学中の過半数のものが下宿通学をしながら教育を受けている。夏期の土方と冬期の出稼ぎで生活を維持している多くの農家にとって、この教育費（月15,000円～20,000円といわれている）は極めて大きな負担といえよう。これは親の側の強い教育意欲を示すものであるが、同時に、学歴をつけることによって、より有利な就職ができるという計算もある。親としても学歴をつけるために多額の投資をしておいて、卒業後息子が生活費すら満足に得られない農業に就くことを期待はしない。〈町の中に職場がない410, 416〉 という理由もあるが、農家の長男は確実に都會に流れていくことになる。

第4に、長子相続制度廃止に伴う親及び子どもの意識の変化が、農業後継者を減少させている。〈昔からの仕来りで、長男は残る408〉 〈大体長男は外に出ても責任を感じて帰ってくる411, 433〉 といった話は30代以上の農家の長男にあてはまることがある。〈農家なら農業という考えが崩れつつある404〉 〈長男だから跡取りという考えはない407, 431〉 〈長男があとをつぐ風習はうすらいだ432〉 といったところが現実で、親はそれを〈勝手な行動407〉 と不本意に思うとしても、農業事情を考えると、一概に悪いことと決めつけることもできない。ある親は〈時勢だとあきらめ407〉、また、別の親は子どもの希望を積極的に支持する。農家の伝統的な「長子相続」の発想が崩れつつあることは、ムラの人々も長子の都會流出に対して許容的になる。その結果、長男はじめ親も跡継ぎの都會流出に対する心理的抵抗が弱まり、都會流出に一層の拍車がかかる。

その他、〈若者の都會へのあこがれ404〉 があり、親としてもこのあこがれを一応充たす気持で都會に出す。

* 本報告では〈〉内の数字は面接のケース番号を示す。

いわゆる過疎地域の家族関係(8)

多くの場合、年限を切るとか、親が元気なうちという約束のもとで都会に出す。しかし、都会生活が長くなれば都会での収入が農業収入をうわまわること、都会で責任のある地位につくこと、身体がなまり農業ができなくなること、妻や子どもの教育上の理由など帰郷を妨げる条件がふえ、親たちの期待に反し都会に腰をすえる結果になる。

若い農家の跡取りの都会流出の原因として以上のような理由がある。なかでも、第1の「農業だけでは貧乏な生活しかできない」という要因は、今後のわが国の農業政策を考える上で、基本的な解決すべき問題である。頓原町の人々が「生活できない」というその生活水準は、百姓という言葉から連想する「水呑み百姓」の生活水準では決してない。テレビ、電気洗濯などの電気製品の他に、プロパンガス、各種の農機具、自動車（軽自動車やバイクを含めれば、ほとんど全戸にあるという）を保有している。食生活も、老人によれば昔の正月や祭にしか食べないようなものを日常生活で食べるようになった。生活水準の向上にともない、ムラの生活様式も自給自足から金のかかる生活様式へと変化した。しかもその生活費は農業収入ではまかなえず、生活費の大部分を夏の土方仕事や冬の出稼ぎでやっとまかななっているのが現状である。農業1本で生活できる農業へと改善されない限り、農家の老令化が進み、いわゆる「じじ・ばば農業」へと衰退の一途をたどり、このままでは20年、30年後には崩壊するであろう。

農業崩壊への雪崩が始まった現在、この流れをくい止めることは、個々の農家の努力あるいは村の力ではできない。各農家のでき得る唯一のこととは、いかにして生存していくか、その対策を家庭の事情に応じて考え、努力する以外に方法はない。農家の跡取りをはじめ子どもを高校、大学に進学させ学歴をつけさせるのも、また技術を身につけさせるのもその努力のあらわれであろう。その結果、頓原町の農業が危機に直面したとしても、われわれ第3者が農家の人々を批判することはできない。日本農業（稲作農業というべきかもしれない）の崩壊の歯車はすでに動き始め加速しつつある。これをくい止め得る唯一のものは農業政策の抜本的改革以外にない。

2) 各農家の後継者対策

10代、20代の農家の跡取りの都会流出が続き、農業後継者がいないという一般的な状況下において、各農家はそれぞれどのように対処しているであろうか。農家の多くが「百姓は自分の代で終る（終ってもかまわない）402, 406, 415, 422, 425, 426, 431」とやや自棄っぽち氣味に話してくれた。先祖代々受け継いできた田圃に対す

る愛着は農業をする者にしかわからない。時代めいた表現をすれば、農民にとっての田圃は武士の刃にも比喩できよう。〈百姓は自分の代で終る〉と一見事もなげに語られた言葉の背後には万感の思いがそこに潜んでいる。それは農業の基盤である田畠を売買することではない。田畠を荒地として放置することである。過去何百年何十年と代々受けつがれ、丹精こめて耕作され、初夏の田植に始まり秋の収穫をくりかえしてきた愛すべき美田に、雑草が茂り、荒廃して行く姿を農家の人々は直視し得ないであろう。* 〈田圃は自分の目の黒いちは守りたい426〉〈自分の代はやれるだけやる402, 409〉という言葉の背後には利害損得を超越した「田圃（又は農業）」に対する愛着が感じられる。この愛着がこれまでの日本の農業を支えてきた。しかし、この愛着がどれだけ強くとも、現在の農業事情では人並みな生活すら維持できない。親は貧乏な生活に耐えるとしても、〈冬は季節労務に出かけ、夏は田圃いじりと土方仕事、といった今の生活を息子にくりかえさせたくない424〉と考えるのは当然といえよう。まして子ども自身が百姓を希望していないとなれば、〈子どもに農業をやってくれとはいえない405, 414〉〈子どもが百姓をすることを望むものではない422〉〈自分としては跡取りをこんな所に住ませたくない気持だ424〉となる。

頓原町の農家の人々は、子どもに学問をつけるか、就職条件をよくするために、子どもに大工、美容師などの技術を身につけさせる。面接当時妻と二人でつましい生活をしていた63才のかつては「親方」（地主）と呼ばれた老人は、5男（すべて別居中）、1女（頓原町在住）の教育について、十数年前の苦心と悩みを回顧して、次のように話してくれた。

〈ケース 425〉

高校で、就職させて、財産を分けてやるのがいいか、財産はなくなつていいから学問をつけさせて大学までやるのがいいか、いろいろ意見が出た。それと私どもは子どもが多いから学資もなかなか大変ですしね…。色々話し合ったが、結局、身につけた方がよからうということで、山をどんどん売りました。ほとんど売って、みなそれぞれ学問させた。それで、その学問を捨てて、今さら戻させるわけにもいかず、仕送りでどうにかやっているようなわけです。とにかく、子どもは教育して、それから独立させてやるしか手がない

* 田圃を荒廃させることは、農民にとって手離すことよりもつらいことであろう。手離した田圃が、たとえ他人の手でも、立派に耕作されれば、そこに救いがある。

と考えた。息子はサラリーマンで、永久就職だ。私たちに年をとってどうすると聞くが、「お前たちが残ったところで、農協とか役場とか、限られたとこしか仕事がないけ、戻ったところでお互にぶつたおれることがあるけ、とにかくお前たちはよそでやれ」と言っている。子どもが「来れば面倒みてやる」と言えば、いきおいわれわれも息子のところへ行くような状態になりますわ。民法の改定で、長男が必ずしも継がなければならないということはなくなったが、それでもやっぱり長男にかかるという気持はある。この家も次の代はどうなるかは未知数だ。わたしたちも若いうちは、この家を跡取りが継がにやいかんという気持があったが時代がかわってそんなことはいっておれない。

この老人夫妻の場合、すでに10数年以上も前に子どもに学歴をつけ、独立させることができ、子どもの幸せを中心と考えた親のとるべき最善の決定であると判断した。当時としては危険なカケであったにちがいない。そこにこの老人の苦慮があった。

ここで重要なことは、先の農家の決定が今日では〈先見の明 418〉のある行為として農家の人たちから高く評価され、これから農家の生きて行くべき指針となっていることである。高校は下宿通学であるため月2万円の学費が必である。それだけの財力のある農家は高校進学させ、資力のない農家は技術を身につけさせる。当然の結果として、農家を継ぐ若者は激減し、〈女や老人が田圃をやる時代がやってきた 434〉ということになる。この間の事情を27才の農業指導員〈414〉は次のように語ってくれた。

ここ2、3年、後継者のない農家が一番苦しいとみていた。おやじと奥さんが年をとりながら百姓をしている。子どもはみな都会に出て帰ってこない。そういう農家が点々とある。農家の後継者がいないわけで、これは一番つらいことだと思っていた。しかし、こうゆう事態（米が余り、百姓一本では貧乏な生活しかできない）になってくると、むしろ先に職場でもみつけて、職場で重視されるようになっている息子がいるような農家は、われわれからみれば、今ではむしろ〈先見の明〉があったことになる。

このように農業に対する考え方が、ここ数年間に急激に変化し、〈農業では幸せな生活を期待できない〉という考えにかわってきた。若い農家の跡取りは、より多い現金収入を求めて、都会へと流出していく。親としても自分の代で百姓が終るその淋しさに耐えながら、時代の流れ、息子の幸せのためとなかばあきらめ、年老いた身体にムチ打ち、元気なうちはとムラで頑張る。しかし、

労働年令は老令化を年1年とたどりかつての美田も確実に荒廃してゆくことになる。そして、田が荒廃したところをみるとどけ、老いた親たちは息子のいる都会へと住みなれた村を離れることになる。これが頼原町の現在及びごく近い将来の農家の姿といえよう。

3. なぜ若い農業後継者がいるか

(大蔵村の場合)

大蔵村では、過去何世紀にもわたって続いてきた農家の長子相続の伝統がなお受けつがれている。表Iから推測される限りこれが大蔵村の跡取りの現状である。義務教育を終えたばかりの10代の長男も、頼原町の場合のように高校進学もせず、また都会に就職することもなく、村に留まり農業を継ぐ。激動する日本経済のなかで、ここばかりは昔ながらの農村生活が営まれているかの印象を受けるが、はたしてそうだろうか。

1) 長男はどのような気持で農業を継ぐか（村人の認知）

農家の人々は、農家の後継ぎ状況について〈長男は残っている（長男は残っているから心配ない）202, 204, 205, 213, 224, 226, 234〉〈長男が残るのは昔からの仕来りだ208〉〈跡取りがなくて困っている家はない234〉〈長男に生れたらここでやる238〉〈長男も自分が継ぐべきだと思っている209, 212〉〈長男は親を捨てて出られない203, 217, 226〉など異口同音にどの農家も長男が跡を継ぎ、世間一般で問題となっている農家の後継者難は、この大蔵村では無関係であるといわんばかりである。これらの自信に満ちた話の背景には、「長男は農業を継ぐべきもの」という長い間日本の農村で培かれてきた長子相続の伝統が現在も受け継がれ、若い長男たちの職業選択における重要な決定因として根強く残っていることがわかる。

しかし、跡取りが現実に確保されているとはいえ、手離して喜んでばかりはおられない。それは、若い跡取りが必ずしも自主的に村に残っているのではない、ということである。今の若い跡取りが、農業を高く評価し、自主的、積極的に村に留まるのでは必ずしもないという話をいろいろ聞かされた。たとえば、

- ・長男たちも都会に出てみたいという気持は大いにある。だが親を捨て切れないで、やむをえず残るということだ〈212, 217, 218, 219, 224〉
 - ・若い長男は雪国でがんばって生活していることもないという〈223〉
 - ・長男のなかには、次三男に生れればよかったと思っているものもいるようだ〈202, 215〉
- などの親たちの認知を考えあわせると、長子相続という

いわゆる過疎地域の家族関係(8)

伝統的な重荷を背負い、やむなく跡を継いでいる自己犠牲的な長男の姿が浮んでくる。都会へのあこがれ、冬期6ヶ月近くも夫婦の別居を強いられる出稼ぎによって、やっと生活が維持される農業への魅力の欠如など、都会のもつ魅力は益々強くなる。また、都会という未知の世界に飛び込み、精一杯努力し、自分を試してみたいという若者らしい夢も、次三男同様に持っている。しかし、長子相続の伝統の強い村では、〈親への義理を裂くわけにいかない。極道になるわけにはいかない²¹⁹〉。義務教育を終了したばかりの幼い跡取りには、職業選択の自由すらない。長男という運命とあきらめざるを得ない。農業を継ぐ動機が、昔からの仕来りといった外的動機づけであり、内的動機づけにより農業を継ぐのではないとすれば、中卒後の自我意識の発達とともに、農業を続けることに疑問を抱き、悩む者が出るのも、また当然といえる。

2) 跡取り確保策の実情

これまで、農家の人々は〈長男が継ぐのは昔からの仕来り²⁰⁸〉であり、疑問をはさむ余地のない長男の運命として跡を継いだ。しかし、最近では長子相続制が否定され、また、現金収入という経済的観点からみても、都市労働者の方がはるかに有利である時代を迎えると、長男の自主性を待っていては農業後継者は確保できない。農家の親としては、先祖代々受け継いできた田園への愛着も強くまた、何十年と続けてきた生活様式を変えたくない、という親のエゴも手伝って、長男の引き留めが積極的に行なわれている。77才の老人はその事情を次のように述べている。

《ケース 211》

孫（長男21才同居）には跡をとらすつもりだ。孫は中卒で、就職させると戻らないので就職させない。昔は『可愛い子には旅をさせよ』といったが、今では旅をさせたら出て行ってしまう。また、金をかけて新庄市の高校（下宿通学）に出したら、もう家の方によりつかない。だから、高校なんかやったらいかん。

孫にあまり言うと出て行かれると困るので、おっかなくて親も何もいえない。自分たちは養老年金があるから、何があっても暮していけるからおっかなくなない。54, 55（父親の年齢）にもなってから子どもに逃げられたら大変だ。ここは雪が多い（平均3～4mの積雪）ので年寄りを置いていけない。ここらだって食べるものがいるわけではない。この土地にいたって樂は楽で食べることの心配はない。

また、44才の農家の主人は中学を卒業して農業に従事している長男（16才）について、次のように述べている。

《ケース 238》

長男（16才）は末青年だから、土方など重労働はだめだが、軽作業の出稼ぎに出そうと思っている。無理にとはいわないが、長男の出稼ぎは生活の足しになる。長男もこの村の息子がだいぶ出稼ぎに出るのを見ているから、出たい気持でいるらしい。また、向こうの仕事の方が大勢のなかでやる仕事だから、農業よりよいようだ。

一旦外に出してしまったら、恐らくまた農業をやる気持は持てないだろう。だから、中学を終ると一緒に働いて農業に慣れてもらいたい。

出稼ぎするにしても、大工などの技術を身につけた方が得なのだが、都会で技術を身につけさせたら、農業をする気持はもてなくなる。技術を身につけさせのは親としてどうかと思う。

長男には跡を継いでもらうが、そのかわり車の免許をとらせ、車を買ってやる。また、住宅も改築をして……。なにしろ、気嫌をとらないと……。

これらの例からもうかがえるように、各家庭の長男引き留め策にはいくつかの共通点がみられる。すなわち

- 1.長男に農業を継がせようと考えていること。
- 2.そのためには高校進学や都会での就職を許すべきではないと考えていること。換言すれば、学問をつけたり、技術を身につけさせると農業をする気がなくなるという親のエゴ（計算）がある。〈あまり学校にいすぎて、考えがよすぎて、失敗した人もいる。現在次男が継いでいる²²〉。大蔵村では長男の高校進学率が極めて低いが、それは単に教育費がかさみ、負担しきれない（下宿代を含め月15,000円は必要という）という理由ばかりではないようだ。

- 3.今の若い者の目は都会に向き、自から進んで農業をやろうとする者はいないという認識があり、親としても農業を継がせることに多少のうしろめたさを感じ始めていること。

だから親は跡取りの気嫌を取り、気持ちよくムラに残ってもらおうと努力する。〈百姓をやるといっておれば、親としても、買って欲しいものを、黙って買っておかねばならない時代になった^{214, 221}〉というように、跡取りが希望すれば、農機具や自家用車を買い与え、近代的に家を改築したり新築する。

一応どの農家も跡取りが残り、親としても一応安心だ。しかし、一方では跡取りに対する弱味がある。それは多くの場合、子ども自身の希望・要求よりも家庭の事情・親のエゴ*を優先させたこと、換言すれば、都会に出たいという長男を単に長男であるという理由でなだめ

すかせて残したという後味の悪さ、引け目がある。一方10代、20代の跡取りの方にも「好き好んで残ったのではない。親がガミガミうるさいことを言うならば、いつでも出て行く」といった気持がある〈217〉。こういった跡取りをムラに落ち着かせる最も有効な方法は結婚である。56才の農家の主婦は、〈17, 18才の心が固まるまでは出さないようにしている。20才くらいまでに嫁をとつてやれば落ち着くが、あまり早くから長男を都会（出稼ぎ）に出すのは嫌う204〉という。しかし、農家の嫁飢饉は大蔵村でも例外ではない。

3) 大蔵村における嫁対策

長男の跡取りには成功し、心配ないという大蔵村においても、跡取りの嫁問題となると悩みが多い。

- 長男は残っているから心配ないが、嫁で少し困る〈204, 218〉
- 農家に来る娘はいない〈208, 209, 214, 224, 236, 〉
- 長男が結婚適令期になっても、嫁がみつからない〈205, 212, 214, 〉
- 長男だけが、誰も嫁にきてくれない〈217〉
- 今どき百姓をしょうという娘はいない〈224, 237〉
- 親そのものが農家の嫁にやりたくない〈208, 218〉
- 農家の人さえ、農家へ行かなければ幸福になれると考えている〈209〉

など、農家の娘自身が農業を嫌うと同時に、親も娘の希望をとり入れて農家に嫁がせたくない。嫁飢饉は当然おこる。〈嫁さがしに5, 6年かった218〉が、嫁のみつかった農家はいい。〈このムラにはムコになる人はいない。私（母）にはムコさがしはできない235〉〈Aさんは32, 33才になるのだが、今だに嫁の目当てがなくて親方は本当に心配だ。Aさんも嫁がなくてこんな所で暮すぐらいなら、どこへでも出て行こうという気持でいるらしい217〉とか〈近くに嫁さんが来ないから引越す家がある209〉となると、親としても跡取り（未婚の場合）がいるからと安心しておれない。

* 大蔵村の場合、単に親のエゴとばかりはいえないかもしれない。村に残れば「貧しいながらも静かで落ち着いた生活が保障されている」「都会に出た場合には働き手が病気したら一家全滅だが、ムラではそのようなことはない」「ここに先祖がいるからうまく住めるが、外に出て自分が先祖になるのは大変だと思う」など〈207, 211, 214, 219, 220, 234〉の発言があった。親自身もムラに残る長男の方が、都会に裸一貫で出る次三男よりも、経済的に恵ぐまれていると考えているようだ。こういった発想は頓原町の農家にはなかった。

先の頓原町では、嫁飢饉は各農家で解決すべき問題であり、ムラ全体の問題とはならなかった。しかし、跡取りを残し、農業を継続させることが昔からの仕事り、と考えられている大蔵村では、嫁飢饉はムラの在続にかかる重大問題として受けとめられている。〈娘は外へ出しが、自分の息子には嫁が欲しい。そこで最近では一戸に一人は娘を残すよう義務づけている218, 224〉〈こんな山の中に都会から嫁にくる娘はいないので、嫁さんをもらう気持があるのなら、自分の娘もムラに残すくらいの気持が必要だ、と部落の婦人会などで話が出る208, 209〉といった話し会いがなされ、〈昨年あたりからムラでも女人を残すようになった207〉という。しかし、〈近頃の若い娘の考え方は気ままで、自分さえよければという気持が強く、親のいうことはなかなか聞かない207〉〈娘を交換し合うくらいのつもりならうまくいくだろうというのだが、動物でないのでうまくいかない208〉というように、問題は深刻だ。〈農家の場合、娘は早くないと困る。子どもができないことには、親は早く楽になれない。早く嫁をとり、早く子どもを作り、早く子どもを使うという考えだ。だから、この辺では24~25才で嫁をとる。しかし、今どき百姓をする娘はいない237〉という66才の老人の話からもうかがえるように、農家における嫁の地位は極めて低かった。現在では嫁の地位が向上したとはいえ、嫁の立場からみれば、決して満足すべき状態であるとはいえないだろう。そのことを一番よく知っているのは、村の娘や親たちである。長男は残るが、その嫁確保の有効な対策がない大蔵村においては、嫁飢饉は今後一層深刻さを増していくであろう。そして嫁飢饉が深刻になれば、それだけ跡取りの確保がむずかしくなるだろう。

IV 結論

稻作中心の豪雪地帯という共通した基盤をもつ山形県最上郡大蔵村沼の台と島根県飯石郡頓原町の二農村を取りあげ、農家の跡取り問題を中心に農村の現状を検討した。二つの農村には東北地方と中国地方といった地理上大きな違いがあるように、二つの農村にみられる跡取り問題又は農村の現状には、現象上大きな差異がみられた。

頓原町の場合、農家の親子とも、人並みの生活すらできない現在の農業は、息子が新しく選択する職業としてはふさわしくないと判断し、若い跡取りも積極的に都会に出て行く。また、現在すでに農業に就いている親たちも、夏の土方、冬の出稼によってやっと生活が維持されるといった農業にあいそをつかし、でき得ることなら、より現金収入の多い職業にと転職を一応は考える。しか

いわゆる過疎地域の家族関係(8)

し家族の生活が確実に保障されるような条件のよい職がないため転職に踏み切れない。また、経済的な問題の他に何百年、何十年も昔から受け継がれ、精魂込めて耕作されてきた田圃には損得勘定をぬきに愛着がある。更に転職することによって生ずる生活様式の変更に対する強い心理的な抵抗もあるし、若くはないという肉体的な限界も考慮に入れると、自分の代だけは頑張らざるを得ない。しかし、息子にまで自分の歩んだ苦い経験をさせたくない。いきおい学問をつけ、あるいは、技術を身につけさせ、就職の条件をよくしてやりたいと思う。当然の結果として若い後継者が流出し、農業の老令化が促進される。

これに対して大蔵村では、義務教育を終了したばかりの若い農業後継者が確保されている。この両地域にみられる後継者に関する違いの最大の原因は、「生活できる（又は生活できない）」というときの判断基準の違いによるものであろう。頓原町では「農業だけでは生活できない」「農業だけでは人並みの生活ができない」という話をよく聞いた。頓原町の農家の人々が考える人並みの生活とはどんなものであろうか。それは次三男という理由で、都会へ出ざるを得なかったかつての同級生たちの営んでいる都会での生活水準が基準になっているようと思われる。10年あるいは20年前に裸一貫で、いわば追い出されるようにして村を出ていったかつての仲間、次三男たちが、戦後の飛躍的な経済の高度成長のなかでたどった生活水準の向上には、目をみはるべきものがあった。それにひきかえ、農業収入はあまりにも低く、ムラの質素な生活すら維持できない。夏の土方と冬の出稼ぎでやりくりする農家の生活はみじめすぎる。せめて都会に出た次三男並みの生活ができるて当然というぐちも出る。

一方、大蔵村の人々も農業1本で食べて行けないことは、頓原町の場合とすこしも変りない。むしろ大蔵村の方が農業外収入（主として夏の土方と冬期出稼ぎ）の生活費に占める割合は頓原町の農家よりも多いだろう。大蔵村の農家の人々が求める生活水準は、頓原町の都会並みとは異なり、「食べて行けるか」といったものである。換言すれば、「喰い外しのない生活」が判断の基準になっている。農村ならばどんなに悪くとも「喰う」だけの最低生活が保証されている。しかし、都会生活は現金収入が多い一方では、家の柱となる主人が病気や事故死などしたら、その家庭の生活は悲惨そのものである。

* しかし、大蔵村の10代、20代の若い人たちが、こうした貧乏ではあるが喰い外しのない生活に満足しているわけではない。

農村ならば、病気をして休んでも、田は休まない、と考える。いろいろな点で、親の代を継ぐよりも、都会に出た人々は幸せだという気持があるようだ。しかし、ここに先祖がいるからうまく住めるが、外に出て自分が先祖になるのは大変だと思う。家をたてるにしても、ここなら材木も土地もあるから簡単だが、都会は大変だ
202, 213) <こちらは、たとえ難儀しても食べるだけの米はある。孫の長男あたり、あちら(都会)へ行った方がいいと言っているが、あちらでは米を食べるにしても金を出さねばならん211, 234) など、大蔵村の親たちは、若い跡取りが村に残ることが、長い目で見れば幸せにつながると考えているようだ。* こうした両地域の親のもつ「生活できること」の基準（発想）の違いが、農業の後継者対策の差異としてあらわれていると思われる。

これまで日本の農業政策は、自給自足の農村生活を基本とする発想の上で成り立っていた。しかし、日本経済の急激な発展は、農村をもその流れにいやおうなくまきこみ、自給自足の生活様式を破壊してしまった。われわれのみた頓原町はその典型であり、大蔵村はまだ自給自足経済のなごりがわずかに残っている農村の典型であろう。しかし、現代の消費生活の波は確実に一步ずつ農村にまで浸透していくだろう。これは日本経済の発展という立場から見れば、ごく当然のことであり、その浸透が遅すぎるといわれるかもしれない。そうであるとすれば日本の農業行政は、消費生活の農村浸透に十分対処し得るに必要十分な行政処置を施してきたといえるだろうか。単に米の減収に止まることなく、農家の人々の農業意欲をも蝕みつつある減反政策を引用するまでもなく、今までの農業政策はあまりにも無為無策ではなかったか。農村の将来を考えるとき、「農業1本では喰えない」現状から、農業によって豊かな生活が可能な農業へと変化しない限り、農家の若者の都会流出は農村が荒廃するまで続くであろう。そして農村の荒廃がそう遠くない将来に起るのもまた事実であろう。

文 献

続有恒、久世敏雄、水山進吾、荻野惺、織田揮準、永田忠夫、蔭山英順、植村勝彦、鈴木真雄、いわゆる過疎地域の家族関係(1) 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—1970, 第17巻

続有恒、久世敏雄、水山進吾、松田惺、織田揮準、永田忠夫、蔭山英順、植村勝彦、鈴木真雄、いわゆる過疎地域の家族関係(2) 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—1971, 第18巻

続有恒編、鳥取県頓原町における採集資料名古屋大学教育学部教育心理学科研究資料 No. 1 1971

原 著

続有恒編 愛知県富山村における採集資料名古屋大学
教育学部教育心理学科研究資料 No.2 1971
級有恒編 長野県上村における採集資料(1)名古屋大学
教育学部教育心理学科研究資料 No.3 1971
続有恒編 山形県大蔵村沼の台地区における採集資料
名古屋大学教育学部教育心理学科研究資料 No.

4 1971
続有恒編 長野県上村における採集資料(2)名古屋大学
教育学部教育心理学科研究資料 No.5 1972
続有恒編 熊本県水上村における採集資料 名古屋大学
教育学部教育心理学科研究資料 No.6 1972

STUDIES ON THE INTER-AND INTRA-FAMILY RELATIONSHIPS IN THE SO-CALLED "KASO" (TOO-THINLY-PEOPLED) COMMUNITIES (8)

— A report on the successors of farms —

Kijun ODA, Aritsune TSUDZUKI, and "Kaso" Group

The purpose of the report is to analyse the present conditions of agriculture through the successors of farms at Okura village (Yamagata Prefecture) and Tombara village (Shimane Prefecture). The results are as follows:

(1) At Tombara village, the eldest farming sons of thirties and above have engaged in agriculture traditionally. But at present, the eldest sons of teens and twenties are very few who become the successors of farms willingly and most of them find their positions in cities. Many parents (farmers) want their sons to find their positions in cities, too.

At Okura village, parents (farmers) believe that their eldest sons ought to become farmers (successors of farms) and their eldest sons engage (or are engaged) in agriculture.

But many of them become farmers against their will and want to change their occupations.

(2) The most of young farming sons at the both villages are thinking that agriculture in Japan is not promising. The greatest reason is that the income of agriculture is smaller than that of other occupations.

(3) At the both villages, farmers can not live within the farming income, and so they have to go to cities to do piecework (dekasegi) in every winter.

(4) At the both villages, it is very difficult for young farmers to marry, the reasons of which are:

a) There are very few daughters at villages. b) Daughters of farms do not want to marry successors of farms. c) Parents do not want to make their daughters marry farmers, too.

(5) As stated above, the young farmers at the villages may be on the decrease and the agriculture may be devastated in the near future.